

石田仁志／アントナン・ベシュレール編著 『文化表象としての村上春樹 世界のハルキの読み方』

Masato NIHEI (仁平政人 : Graduate School/Faculty of Arts and Letters Tohoku University)

✉ masato.nihei_d6@tohoku.ac.jp

(日本) 東北大学大学院文学研究科准教授。専門は日本近現代文学。主な著書に『川端康成の方法—二〇世紀モダニズムと「日本」言説の構成』(東北大学出版会, 2011)、『寺山修司という疑問符』(共編著, 弘前大学出版会, 2014)、『青森の文学世界(北の文脈)を読み直す』(共編著, 弘前大学出版会, 2019)、『「旅行」する言葉、「山歩き」する身体—川端康成『雪国』論序説—』(『日本文学』第66巻第6号, 2017) など。

The Meeting of Haruki Murakami and Diverse Cultures : *Interpretations of Murakami's Work around the World* Edited by Hitoshi Ishida, Antonin Bechler (Seikyusha, January 2020)

This book is comprised of a collection of papers from two international symposiums on Haruki Murakami. The papers were written by 22 scholars from Japan, France, England, Italy, the United States, and Taiwan. They adopt a variety of approaches to Murakami's work, and what emerges is a phenomenon that changes in the context of different cultures. One of the features of the book is that many of its authors offer unexpected ways to link Haruki Murakami's work with that of other Japanese writers. This feature encourages readers to revisit Murakami's oeuvre and to discover new dimensions in it.

Keywords Haruki Murakami(村上春樹), World Literature(世界文学), Cultural Representation(文化表象), Comparative Literature(比較文学), Adaptation(アダプテーション)

本書は、二〇一八年に日本およびフランスで開催された、二つの国際シンポジウム(「日本・ヨーロッパ・台湾における文化コミュニケーションおよび日本文化表象研究」(東洋大学主催)の一部と、「村上春樹のRealとFuture—表象文化研究の視点から」(ストラスブール大学・パリ日本文化会館主催)の成果に基づく論文集である。

「世界のハルキの読み方」という副題も示唆するように、本書には日本、フランス、イギリス、イタリア、アメリカ、台湾の各国から参加した、文学・映像学の研究者によるバラエティ豊かな論考が収録されている。編者の石田仁志氏は本書の「はじめに」で、「村上春樹」という存在も(中略)その文学の読まれ方、テーマのあり方、受容のあり方など、一つの〈文化〉的な事象であり、それは様々な異文化との接触の結果として受け取ることができる」と述べる。すなわち、様々な〈文化〉との交渉において絶えず生成し変異を遂げる複数的な事象として、村上の文学とその読みのあり方を捉えること(言うまでもなく、そこには翻訳や映像化・教材化など、異質な環境への適応＝アダプテーションも含まれる)。本書に収められているのは、そのような「複数の村上春樹」にアプローチする多角的な試みであると言えよう。

本書は四部構成で、計二十二本の論考を取めている。全ての論考にふれる紙幅はないが、各部の内容について簡単に見ておきたい。

第1部「翻訳・比較文学から見る村上春樹」は、翻訳論的・比較文学的な見地を交えて村上のテクストを分析する四本の論考と、村上の紀行文が持つイメージ戦略的な性格を分析する論考からなる。

第2部「村上春樹における表象—現実・社会・物語」は、紀行文のエクリチュールや、国語教材としての小説「鏡」、夏目漱石からの影響、震災の表象や「森」のイメージ、後発の作家・古川日出男によるアダプテーションなど、多様な角度から村上テクストを検討する八本の論考を取める。特に、震災に関する論考が三本、国語教育に関連する論考が二本取められている(うち一本は双方の問題に関わる)点は注目できるだろう。

第3部「映像との親和性と乖離」は、村上の映画に対する意識や、その文学と映画との関わり(近接と距離)に関する三本の論考と、アダプテーションとしての映画(『ノルウェイの森』、『神の子どもたちはみな踊る』)を分析する二本の論考を取める。

第4部「文化コミュニケーションのなかの村上春樹」は、村上における「コミットメント」の内実や、村上とサブカルチャーとの多面的なつながり、台湾における村上受容のあり方とそれを



石田仁志/アントナン・ベシュレール編著
『文化表象としての村上春樹 世界のハルキの読み方』(青弓社, 2020.1)

支えるコンテクスト、また『1Q84』における「情報」概念の位相というように、多岐にわたる問題についての四本の論考を収めている。

以上の整理からも伺われるように、各部ごとのテーマ・内容の統一性は必ずしも強いものではない。むしろ、個々の論考で示される議論が、テーマや視点・方法においてセクションの境界を跨いで結びつき、時に衝突し、対話を交わすかのようなあり方に、論文集としての本書の魅力があるように思われる。

ところで、本書で印象的なことのひとつは、スティーブン・ドッド氏が『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』について永井荷風や泉鏡花、坂口安吾のテキストとの対比を通して検討していることをはじめ(第1章「影の不変的な重要性—永井荷風『すみだ川』から村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』まで」、近現代の日本作家と村上テキストを柔軟に結びつける視点が、多くの論考で示されていることだ。もちろん、日本近代文学の流れからの距離が強調されがちな日本国内の村上言説に比して、国外でこそ村上は「日本の作家」としてまなざされやすいということは確かだろう。だが、本書中の諸論考は、単に村上を「日本文学」にまつわる既存の枠組に回収するものでは決してない。例えば、アーロン・ジェロー「短編という時間性—村上春樹と映画」(第16章)は、村上が「映画」を概念化するあり方が、「映画の存在の複数性についての認識」と「存在しえたオルタナティブな映画の喪失に対する悲しみとノスタルジア」という点において、稲垣足穂と重なり合うことを指摘する。また、杉淵洋一「震災の内側と外部をつなぐもの—「白樺」派から村上春樹へ」(第9章)は、「白樺」派の作家達の関東大震災にまつわる言説との対比を通して、村上をはじめとした現代作家達の震災をめぐる言説・表現が、「震災の内部と外部」の境界線についての意識を取り払うことを志向していると論じる。これらの論考は、一見思いがけないような作家・文脈と関連づけにおいて村上のテキストを読み直すものであるとともに、「映画と文学」、「震災と文学」というトピックにも新たな光を投げかけているといえるだろう。(なお、意想外の対象と関連づける視点は、「日本文学」に関わる論考にだけ見られるわけではない。例えば、石田仁志「夢はどこへ向かうのか?—村上春樹とイスマイル・カダレ」(第5章)は、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』の「夢」・「夢読み」というモチーフについて、アルバニアの作家イスマイル・カダレの小説『夢宮殿』との比較を通して考察している。)

以上はささやかな例だが、本書には通念的な村上のイメージを揺さぶり、別様に捉え直すことを促すような刺激的な観点が豊かに含まれている。「〈文化コミュニケーション〉とは文化を創造する場の問題だけではなく、作品と読者とのあいだにこそ展開される」(「はじめに」)とは編者の言葉であるが、そのような意味で本書は、村上文学との新たな〈コミュニケーション〉に向けて読者を誘ってやむことがない。